「いわむろのみらい」創生プロジェクト

観光複合施設チーム 週刊ニュース

No. 2
2006/11/07 発

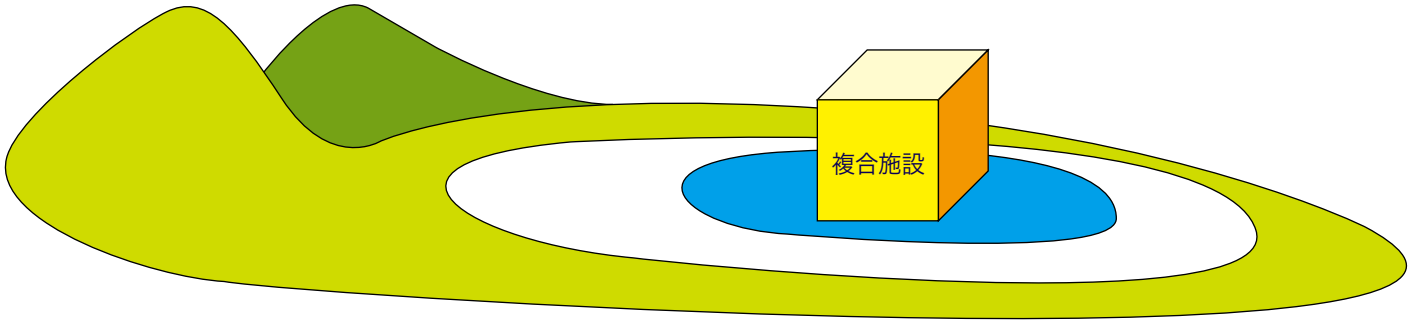
武蔵野美術大学建築学科　高橋スタジオ

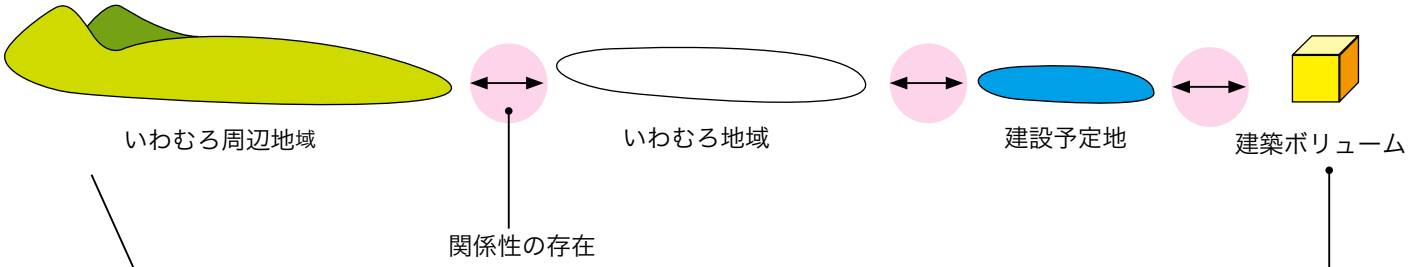
今週のテーマ

プログラム提案 ボリュームスタディ

ボリュームスタディ

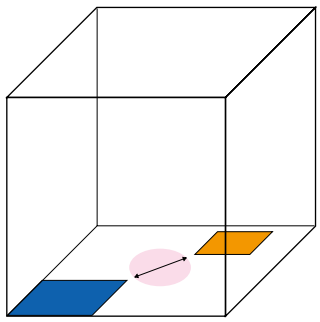
複合施設はそれ単体で存在し得るものではありません。建設予定地があり、その周りの環境があり、さらにそれらを包む地域があります。まずこの包含関係を理解し、それぞれにどのような関係性があるのかを把握すること。そして周りとの関係を考慮することから出てきたカタチと、建築内部で期待される出来事から生まれたカタチとを合わせて模型上で配置して検討を重ねます。





プログラム

プログラムとは建物の内部においてはもちろん、ある規定された場所（＝機能や用途を持つ場所）と場所の間における出来事を言います。例えば建設予定地に隣接する伝承館と複合施設の間。人の流れや溜まりなどを考慮し、全体の中でその場所がどのような出来事の起こる場所であれば良いか、試行を重ね組み立てます。ボリュームスタディと平行して場所同士の関係性における人々の活動について考えていきます。

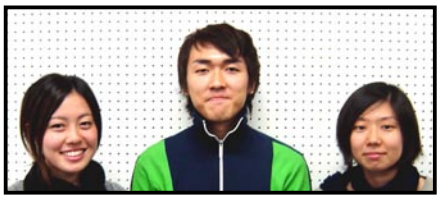


建築内部における出来事の関係性

今週の活動

- プログラム提案
- ボリュームスタディ

先週打ち立てたコンセプトに基づいた、いわむろの土地の文脈における複合施設の在り方を敷地模型の上にボリュームを配置しながらプログラム (＝表紙参照) の問題と合わせて検討を重ねていきました。



武田京子 / 山岸啓介 / 澤口和美

私達 A グループは、キーワードを " 子供 " に設定しました。
現地調査で子供たちが遊ぶ場所に視点をあてた時に何か物足りなさを感じた為です。
今回私達が取り組むのは観光施設ですが、岩室に住んでいる人たちも共有できる場所を備えた施設をつくりたいのです。
そして、建物の形を考えるにあたり三人が共通して考えている事は " 地形をとりこむ " ということです。例えば、山や田んぼ等を一つのヒントとして形をつくります。
建設予定地を空から眺めた時に岩室という場所が凝縮されている、そんな建物が考えられたらなぁとおもっています。

A グループ

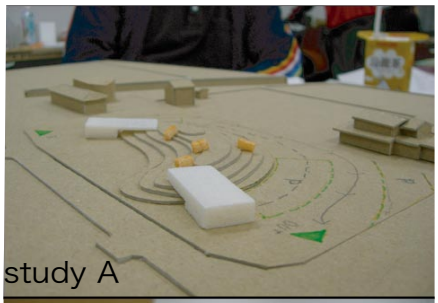
地形を取り込む

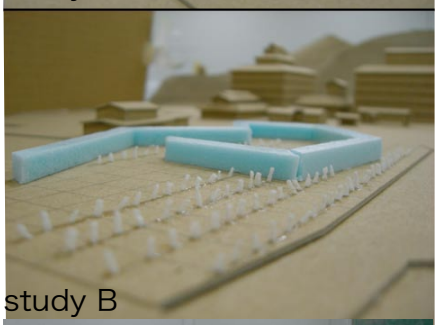
例えば。。。
形をつくる上で山や田んぼ等をヒントとする

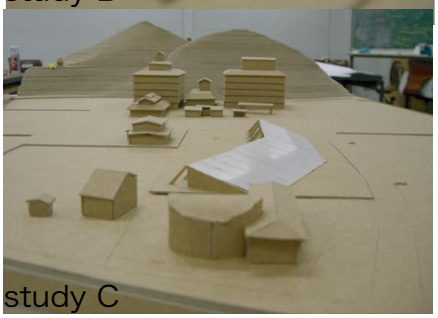
study A:
丘をつくる

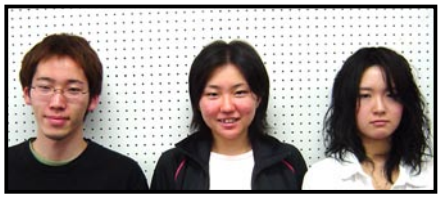
study B:
稲穂のイメージ

study C:
松岳山への視線


study A


study B


study C

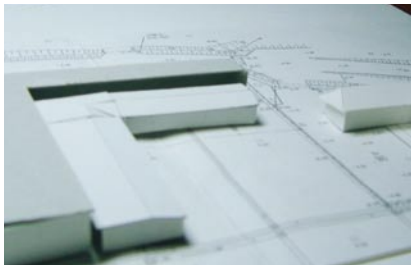


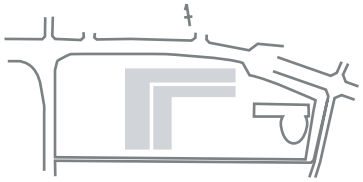
大坪拓摩 / 高嶋美穂子 / 小山内晴海

B グループ

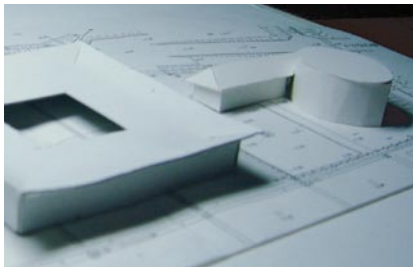
今回私たちが提案するボリュームスタディ３つの案。

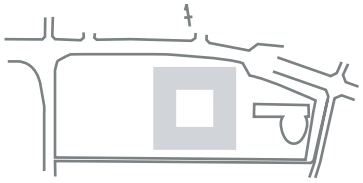
今回自分たちからの提案は３案です。上から順に説明していきますと、複合施設を２棟でつくる案で片方の屋根を低くして反対の建物に設けられた縁側から見ると屋根の上に空が広がり高い山が見えるという案です。次の案は四角い建物に中庭をつくり屋根を内側に傾斜させて縁側から反対側を見ると前の案と同じように四角くきれいに空を枠どるように見えるというものです。最後の案は今回の敷地が中心街から少し離れているということでこの建物を観光客のいわむろ体験の導入部分となるように建物と建物の間に特産物を並べて販売できるようにします。そして車を停めて通りを過ぎて進んでいくと温泉街へとつづいていくという案になっています。



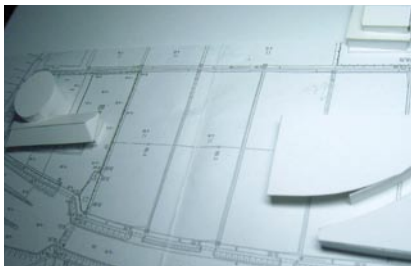


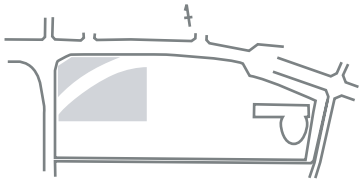
①屋根と空がつくる１本線



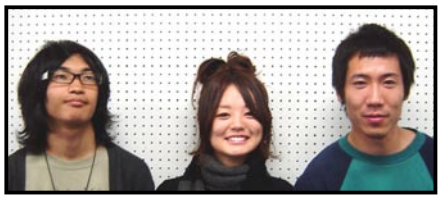


②内に傾斜する屋根





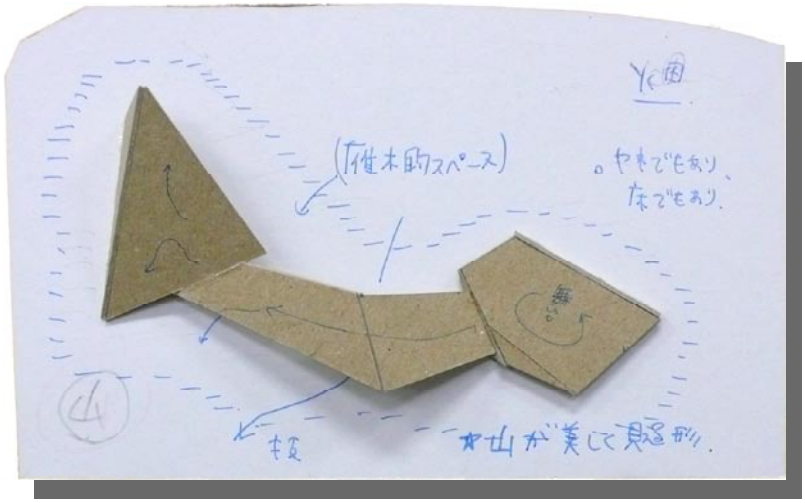
③温泉街への導入部分として



櫻井脩・阿部しおり・佐野元春

C グループ

私たちＣグループは､人と人とのつながり、人と街のつながり、"イワムロ"という場で新しく形成された、〝つながり〟というものを大切にしたいと考えています。
先日、岩室に行かせていただいた際に感じた人のあたたかさ、温もり、かっぽうぎ隊のみなさんにふるまってもらったおいしい郷土料理…。その中で私たちは「おもてなし」というキーワードを導き出しました。人の温かさや誠意をどのように建築に反映できるだろうか？決して押し付けがましくなく、細やかな気配りがなされ、ちょっとした驚きのある「おもてなしの建築」を目指してアイデアを出し合っています。

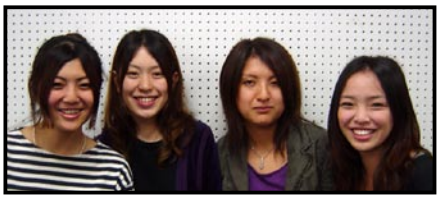


５００分の１イメージ模型の一つ、
山の景色が映えるような形を意識。
屋根と床、両方の機能を持つ勾配。

山路達彦・黄明奕・鈴木慶一郎

今回のボリュームスタディでは、２＋２＋３の計７つを発表しました。
最初のスタディなので大きな方向性を話し合い、３人がそれぞれ考えたものを持ち寄ってさらに検討を重ねました。
メインの施設機能が定まらない為、サブの機能から考えたり、敷地周辺の情報から繋げたり、形態操作から膨らませたりと、それぞれが別々に手がかりを探りました。その結果いくつかの共通点を得られました。
『南西の山々を望む景観の考慮』、『北側道路に対し斜めの動線配置』、『駐車場の別価値付加』等です。
今後はこれらを手がかりに取捨選択しながら、さらに一段階絞ったものを目指していきます。

Dグループ



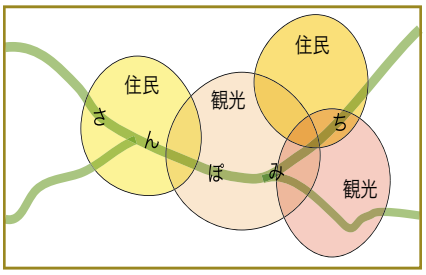
熊坂有華 / 山口かすみ / 笠井悠紀子 / 國安萌夢

私たちのグループは「岩室のまちを歩くように、気軽に施設の中を散歩できるような建築」というコンセプトをたてて考えていきました。岩室は観光地と住宅地があいまいに混在しているのが特徴の温泉地だと思います。この施設の中も岩室のまちと同様に、観光のためのスペースと地元の人が活用できるスペースをはっきりと分けてしまうのではなく、それぞれの空間を重ね合わせて部屋と部屋の領域をあいまいにしたいと考えています。そしてその中を訪れた人が気軽に岩室のまちを散歩するように歩き回りながら、地元の人とあいさつをしたり話をしたりして直にふれあうことで岩室を体感できるような施設にしていきたいと考えています。

Eグループ

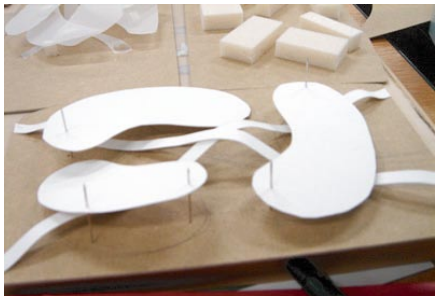
いわむろのみらい

岩室のまちを歩くように、気軽に
施設の中を散歩できるような建築



イメージ図

- 散歩している最中にふらりと入っていけるような施設
- 豊富な体験学習のゾーン
- 建物それ自体が遊具のように楽しめる高低差をつけた道
- あいまいな地元民と観光客の境界線
- 地元と観光地、その境界にある中立のスペースの設営



阿部妙子 / 滝川寛明 / 田辺愛

F グループ

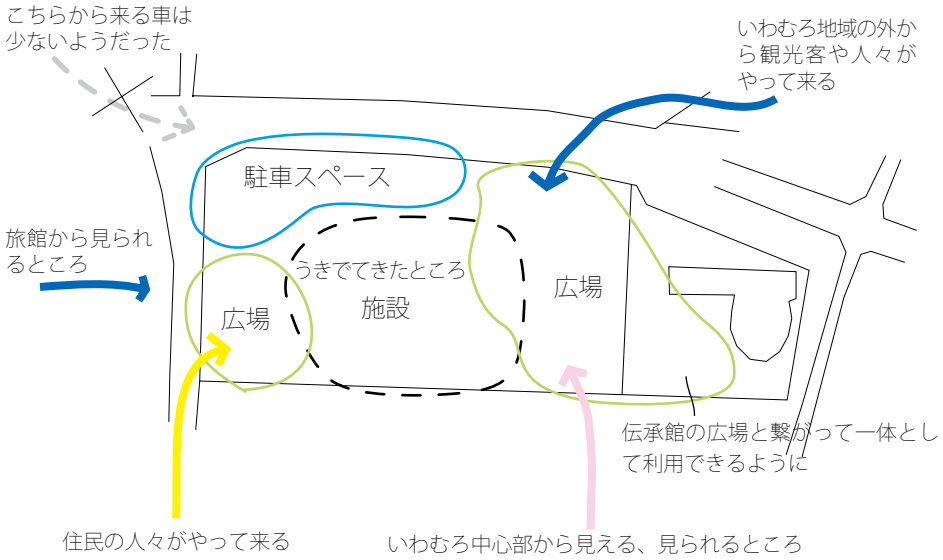
試行錯誤の結果、
生み出された３７個の模型 ▶

今週は、敷地に対する建物の大きさや形、車や人の導線について考えました。

模型を３７個つくり、それぞれ検討した結果、北側の道路に面して駐車場を配置し、南側に建物を持ってくるという形に落ち着きました。

また、施設にどのような空間があって、そこでどのようなことが行われるのかについても話し合い、観光客も住民もいっしょに使っていけるような内容を提案しようと思います。

これからはそれをもっと具体的につめる作業をしていきます。

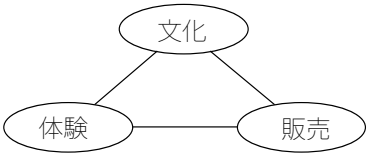


岡村邦博 / 岡本草太

G グループ

今回のスタディはボリューム提案ということで自分達のコンセプトにそって簡単に形にしてみました。このＬ字型をとったのは北側のひらけた景色を建物から楽しめ、かつ敷地の南側に大きく駐車スペースを設けられることや、駐車場から建物のどの施設にも最短距離でアクセスできる形であることなどの利点が考えられるからです。また空間的にはひとつでも曲がることによってできる境目を、機能ごとに分けることができる形でもあります。ボリュームスタディ模型には表現していませんが、伝承館との間に簡単な“農業体験農園”のようなものと南西側の景色を堪能できる公園も設置したいと考えています。

施設に持たせる機能

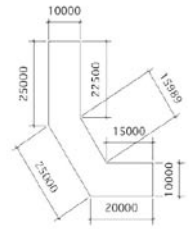


主に「文化」「体験」「販売」の３つの要素を持った施設を計画。たとえば足湯などはこの施設を利用する人たちが景観を楽しみながら利用できる空間とする。

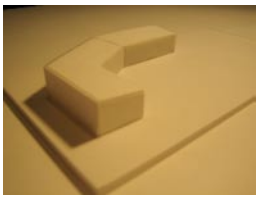
体験　農家の畑のうちいくつかを観光客に『農業体験農園』として解放し、そこで農業を体験してもらう。施設内では季節別の収穫物の説明や、農園で採れた野菜を食べるコーナーを設置。

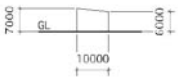
販売　地元民と観光客のコミュニケーションの場としての、景観を楽しむ喫茶店や岩室の特産物を扱う物産展を設置。

文化　写真の展示スペースや岩室を知ってもらうマップを展示するコーナーを設置。

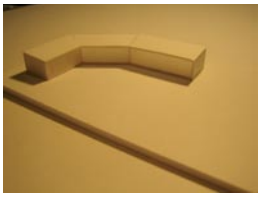


屋根伏図





立面図



スタディ模型
開放的で景観を楽しめる施設を目指し変形Ｌ字型の建物外観。

今回行われたボリュームスタディの数々。
来週までに更にこれらを繰り返して内容を深めていきます。

次号予定

11/10(金) 授業内容

- ボリューム配置
- ゾーニングの中間発表

今後２週間にわたり、今回発表したプログラム提案とボリュームスタディの内容をつめる作業をしていきます。

今後の予定

11/17(金)
ボリューム配置、ゾーニングの中間発表
11/24(金)
12 号館で中間発表基本的な空間構成確定
12/1(金)
デザインスタディの詰め、提出物作製
12/6(水)
提出〆切
12/7(木)
講評　作品の洗練作業継続 (~12/22)
12/15(金)
バーティカルレビューで選抜作品講評
12/22(木)
岩室関係者にプレゼンテーション
(ムサビにて)

編集後記

ニュースレターも第２号となり、各グループの発想も具体的な形として現れてきつつあります。しかしこのニュースレターの編集に携わるようになり、私たちは最も根本的なことに突き当たりました。それは力を合わせて何かを作り上げるとき、自分、そして相手の考えや思い、願いを伝え合い、理解しあうことがいかに難しいかということです。何かを人に伝える為にはまず考え、どんな方法が良いのか、どんな言葉が良いのかをしっかりと選ばなければなりません。加えて、一つのものを作り上げる為にはそれぞれが考えていることを共有し、それを向上させていく必要があります。

ただ単に一人の人間がたくさん、バラバラに集まっているのではなく、共通の目的があって同じ方向を見て動いている。まだプロジェクトが始まって日が浅いですが、そのような動きの中で、私は初めて伝えることの難しさを痛感しました。このニュースレターは正に " 伝える " ことが目的です。どうすればムサビの学生の考えていることが伝わるのか。　これを読んでくださっている岩室未来研究会の方々に私たちが何をやろうとしているのかが " 少しでも " 伝わったなら、編集に携わった者として嬉しく思います。

2006 年 11 月 07 日　伊井　洋貴

観光複合施設チーム
週刊ニュース

創刊号　2006 年 11 月 07 日 発行

編集者
「いわむろのみらい」創生プロジェクト
コアメンバー：建築担当
赤松慎太郎　伊井洋貴　川田誠
三好怜美　村井祥平　和田瑛里

企画：建築学科三年高橋スタジオ